

42127

教科書文庫

4
810
42-1909
200030
2298

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

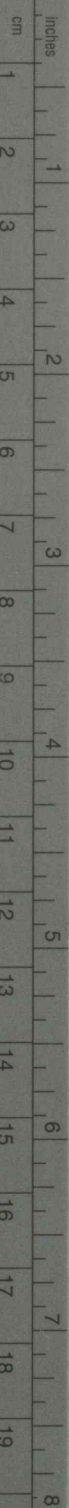


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Me9
資料室

訂再
高等女子讀本
卷六



375.9
Me9

資料室

明治四十二年二月四日

文部省檢定

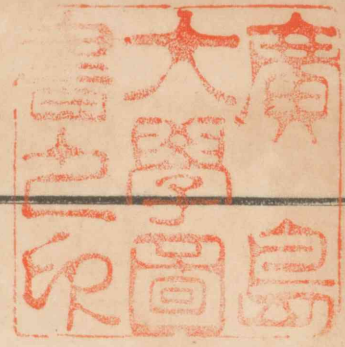
師範學校高等女子學校國語科用

佐藤 球 校訂

明治書院編輯部編

訂再高等女子讀本

東京 明治書院



訂再高等女子讀本卷六目次

一、	忘れがたみその一	一
二、	忘れがたみその二	五
三、	波の音(新體詩)	九
四、	埴生の小家	一〇
五、	江戸時代風俗の變遷	一八
六、	繪	二四
七、	永田善吉	二六
八、	色	二九
九、	動植物配合の美	三四

再訂高等女子讀本卷六目次

一〇、	潮の八百路	三八
一一、	蔚山沖海戦ノ公報	四一
一二、	カミとマゴコロ(口語)	四四
一三、	萩の戸の月	四八
一四、	伊勢神宮の尊嚴	五四
一五、	農人形	五八
一六、	格言	六〇
一七、	少女緹縈	六二
一八、	蘇武(新體詩)	六六
一九、	岩倉公の逸事その一	七一
二〇、	岩倉公の逸事その二	八〇

二一、	籠居雜詠 短歌	八六
二二、	細川幽齋	八七
二三、	女流の俳諧	九三
二四、	シカゴだより	九六
二五、	ナイヤガラ瀑布	一〇〇
二六、	今様三首	一〇六
二七、	赤十字社	一〇七
二八、	メーリーライオン	一一一
二九、	道話一則	一一九

卷六目次終

再訂高等女子讀本卷六

一、忘れがたみその一

實に、人は、はかなきものなり。今日の夜は、まだ、過ぎ去らざるに、ひたすらに、明日・明後日のことにのみ、とかく、心を移しがちに、如何なる天の災が、すぐ、眼前に迫ればとて、一寸先は闇の譬、明日ともいはず、今宵のうちに、深き淵瀨に陥る身とは、つゆ、あらずして、百年の計をなすこそあはれなれ。

災
禍
一寸先は闇

怒(怨)
唄
歌謠

墜
落(墮)

風なく、雨なく、いと静なりし冬の夜は、忽にして、奈落の底を見るに至れり。

泣く者も、笑ふ者も、喜ぶ者も、怒れる者も、舞ふ者も、唄ふ者も、樂む者も、悲む者も、均しく、一度に、聞きたるは、地底に起りし、大山の崩るゝばかりの響なりけり。

すさまじき勢にて、大地は、下より突きあげられ、地上は、さながら、激浪の打つが如くに、震ひ動けり。

安政二年十月二日、時刻は、夜の亥の刻かたとよ。地裂け、天墜つるかど、驚かれたり。

見るゝ、百萬の人家、倉庫、神社、佛閣、倒るゝあり、崩るゝあり、家に忘かれ、瓦にうたれて死せるは、幾許なるかを知らず。

呼
喚

一時に、落ち來る千萬の瓦、一時に、崩るゝ百萬の家の響は、泣き叫ぶ、老若男女の聲に和して、たとふるにもものあらざりけり。

暫にして、地の震、やゝ、をさまり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、あとに残りて聞えしは、親を呼ぶ子の聲なりけり、子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、殊に、あはれに聞えしは、次第々々に、細くなる、助けてくれ、助けてくれの聲なりけり。

理なるかな、梁に壓さるゝ者あり、柱に挟まるゝ者あり、土に埋るゝものあり、壁に忘かるゝ者ありて、さなきだに、

巷
衢

苦む者は、多かりしに、地のふるひ動くこと、未、止むか、止まざるに、四方の天は、一面に、次第々々に、あかるくなりて、さながら、晝の如くになりしは、處々方々の潰家より、火は、炎と、燃え出し、燄が、天を焦ししなり。

梁に壓されて、身は動かさず、悶え苦む、その處に、燃え來る火のために、煙に咽び、熱さに耐へかね、遁れむとして、あせれども、遁るゝことはかなはねば、聲をかぎり、叫べども、助けに來る人はなく、無間の地獄、修羅の巷、無慚といふも、あまりあり。

此の夜、わづかの時の間に、死したる人の、其の數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いと、哀なる死様の者も、多

護
守
衛

捨
棄

かりけり。

運強くして、不思議にも、其の身は、萬死を遁れしかど、親兄弟の無慚の死を、そぞろに、悲む者もありけり。

一、 忘れがたみその二

これ等は、人の身の上なり。我にも、此の夜の話あり。父は、此の夜は、宿直の番にて、家に在らず。家を守り、三人の子を護りしは、母なりけるが、上なる子二人は、母の左右に寝ね、末なるは、乳母に抱かれて、枕邊に臥し居たりき。

あるまじき事なれども、すは、地震よといふとひとしく、乳母は、抱きし子を捨てて、我のみ、外へと、逃げ出でたり。

母は、啼く子を抱きあげ、右と左に寝たる子を、ゆり起さむと、あせりしかど、稚子をかゝへし身にて、大浪にゆらるる如く、動きつゝ、片手に起す、左右の子は、冬の夜の、寝入りばなにて、起せども、起せども、いつかな、いつかな、起くればこそ。うつゝにて、母に連れられて、外へ出でたる、其の時は、地のゆるゝのも、やみしあとにて、四方の天は、火事の爲に、既に、眞赤になり居たり。

實に、危かりしは、われ／＼親子の命なりけり。そも、安政の地震には、水地なる舊家の、潰れぬものは稀なりしが、我等が住ひしふる家も、潰れぬばかりに、傾きたり。今において想ひおこすも、身の毛のよだつは、此の夜の

恨
怨

ことなり。此の地震にて、我等が家の、もしや、潰れも去たらむには、我が兄弟は、死したりとも、誰をも、恨むべきならねども、もし、母が死したらむには、われ等が罪にてありたるならむ。

さりながら、此の夜、もし、我等親子が死したらば、何故、母が死せしかは、世に、知る人はなかりしならむ。生くべかりしを、子の爲に死せりとは、誰か知るべき。

今も、なほ、忘れざるは、久しき昔の、此の夜のことなり。實に、ありがたきものは、母の愛なり。母は、其の身の危をも顧みずして、一心に、子を助けむと、爲しゝものなり。

實に、深きは、親の恩なり。我に、今日あるは、かゝる愛を以

危
厄

つて育てくれたる、母ありたるが爲なり。我は、自、知らざれども、我が母が、此の夜の如くに、其の身の命の危きをも顧みずして、我々の身をば、護りくれたるは、幾度なりしか、知れざるならむ。

此の夜のことは、亡き母の、我には、忘れがたみなり。此の夜、われ／＼親子よりも、連拙くして、死せる者には、助かるべきを、子の故に、死したる母は、幾許なるらむ。

此の夜の事は、亡き母の、我には、忘れがたみなり。此の夜の如き天災の、若、今日の夜に起らむには、助かる命を、子の爲に、棄てむとする母親は、幾許なるか、知れざるならむ。實に、深きは、親の恩なり。忘れ難きは、母の愛なり。(外山正一)

三、 波の音 (天和田建樹)

父は、いづかたぞ。 母はいづくぞ。

一人、みなし子を、 此處に残して、

さし來る夕ゑほ、 すぎき波の音、

悲しや。我が身の、 仇か。あの聲は、

かへせ。我が母を、 海のをちより、

かへせ。我が父を、 舊のすみかに、

こたへぬ浦風、 いはぬ波の音、

こひし。我が家の、 跡は此の原か。

父は、かへり來ず。 母はきたらず。

たよりなき此の身、 磯にのこして、

月かげさびしく、 今日も亦暮れぬ。

見わたすうな原、 怨はてなし。

四、 殖生の小家

かねて、期しつる事ながら、昨日まで、綾羅錦繡を纏ひし身を、荒袴衣に著更へしのみか。水汲み、薪樵る業も、助くるは、只、一人の老僕のみ。山風寒き殖生の小家に、良人に事へ、子をはぐくみ、炊き、濯ぎに、日を暮しつ、夜は、熒たる孤燈の

只管
一向

由緒
來歴

濕
霑濡

榮華
榮耀

下に、麻紡み絲繰りて、ふかすも多く、よその見る目は、厭はしけれど、更に、厭はしげなる氣色もなく、まめ／＼しく、勞き勤めて、只管、良人を慰めけるが、生先永き稚兒たちの、賤が子等と、遊びつれて、餘念なげなる様を見ては、さすがに、優しき母心の、あはれ、由緒ある武士の兒と、生れながら、一生を、花さかぬ埋木となしおほして、賤山かづ等と、ひとしなみに、朽果てさせむことの、いかにも、哀しき極にこそと、人知れず、歎かれて、竊に、手織布子の、窄き袂を濕しけむも、幾度ぞ。

稚き兄弟は、以前の榮華を忘れ果て、獵師・木樵の子等に、馴れむつみて、母が苦心を知るよしもなく、日々に、野山

具足
甲冑

浪人
浪士

風説
風聞
風評

に遊びくらし、見やう見まねに、兎逐ひ、柴こる業さへ、まね
びつゝ、互に、伴とし、往きかふ程に、あたりの兒等は、山刀、鎌
の外、見慣れぬ眼に、貴重なる具足、調度など、見出でて、權
次、太作の親々に、歸りて、かくと、物語れば、物識めきたる老
人どもは、さてこそ、彼處の浪人殿は、たしかに、京の歴々方
が、流されてがな來られたに、相違あるまい。兄弟の子も、母
じやの仕附が、よいやらして、惡戯は志ながら、行儀がよい
ぞと、鼻うごめかせば、深い山には、猪、鹿の種が盡きぬに、瘦
せても枯れても、京の歴々の果ぢやとならば、金の茶釜の
一つ二つは、あらうも知れぬと、何心なき、里人の風説を、い
かにしてか、野伏、山賊どもの、聞知りたりけむ。さらば、彼の

苟且
假初



家には、金銀もあるべく、財寶も多かるべし。よき隙あらば、
忍び入りて、我等が榮耀の資本に
せむと、竊に、語らひつゝ、覗ひ居た
りとは、神ならぬ身の、固より、夢に
も、知るよしなき、主人稻葉正成の、
ふと、苟且の感冒の心地して、打臥
したるが、思ひの外に、病勢募りて、
いと、いたう、勞れ果てたり。
さらでだに、かひがひしく、まめ
やかなる福女は、良人の、病に罹り
けるより、日夜、帯をも解かでの看病、少しも、怠なかりける

宵(宵)

が、其の誠心の通じたりけむ。今宵は、熱も、稍低うなりしと覺えて、心地も、さまで、苦しからず。御身は、晝夜、手一つの看病に、さこそは、疲れ候ひつらめ。暫が程だに、まどろみて、身體を勞り候へ」と、情ある良人の言葉、むげに否まば、なかなかに、病の爲に悪しかりなむと、思ひければ、こゝろよく、さらば、暫が程、御免たまはれ」とて、久々にて、己が臥床に入りたれど、病める良人が事、稚兒の上、生憎に、心にかゝりて、夜は更けぬれど、眼も合はず。

折しも、さゆる嵐につれて、遠寺の鐘の聞ゆるを、算ふともなく、數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を見れば、頑是なき稚兒の、寐顔に、笑を含めるは、如何なる夢路をか

算
眠
數
睡

僻
邊
陬

影
陰

辿るらむ。さても、かゝる僻陬に、人となりなば、いつ、成り出づる期かあらむなど、又しても、こし方、行末の事など、思ひ出でられて、眼は、いよく、さえまさり、思はずも、太き息のみつかるゝを、病める良人に、悟られじと、強ひて、小夜衣引被きて、睡れる様を粧はむと、なせる折しも、枕邊の雨戸、ぐわらりと、引開けて、忽はらくくと、足音させ、はや、眼の前に立現れたる、四人の黒き人影は、間はでも著き、曲者なり。あまりの意外に、驚きて、跳ね起きたる福女、何ものぞ」と、聲かすれば、問はるゝ迄もなし。夜陰の稼をなす者なり。今宵、夜更けて、音づれたるも、此の家に蓄へたる、金銀財寶のあらむ限を、申しうけむとてなれば、命惜しくば、残らず出して、

明智殿
日向守光秀

室
内室
内子

われ等に捧げよ。否まば、病みほうけたる、此の家の主人より、血祭せむ」と、簀子、荒らかに、踏み鳴して、息まきかゝるに、福女は、露ばかりも、慌て騒げる氣色なく、さる義ならば、無用なり。主人の病めるを覘ひて、女と侮り、入り込みたる、野伏の愚人ども、そも、我を、誰とか思へる。明智殿の御内に、鬼と呼ばれし、齋藤内藏助利三が息女、今は、稻葉佐渡守正成が室と、知らざるこそ愚なれ。汝等ごとき盗賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮の舉動、そこ動くな」と、いひも終らず、床に懸けたる、紀、正恒が、鍛へに鍛へし業物の、大太刀おつとり、矢庭に、二人を斬つて捨て、尙も、漏さじと、斬りたつるに、残れる二人は、慌て惑うて、逸足出して、逃げ走るを、福

武藝
武術

女は、追うて、庭にまで、出でたりしかど、如法の闇夜に、何方さして、逃げ失せけむ、蹤追ひかけむ、術なきのみか、病める人の上、稚兒の上、はた、いたくも、心にかゝれば、さまではとて、取つて返しぬ。この事、誰いふとなく、風評に上りて、さては、心ざまの、雄々しく、賢しきのみにはあらで、武藝、また、世の人に、勝れておはしけり。かへすがへすも、いみじき女性よ」とて、人々、語り次ぎければ、盗賊ども、聞き怖して、その後は、隙を窺ふことも、あらずなりぬ。

福女とは、誰ぞ、讀む人は、はや、推せるならむ。こはこれ、婦女の鑑と、世に知られし、徳川三代將軍家光の乳母、春日局その人なりけり。岸上質軒—春日局

五、江戸時代風俗の變遷

つくづく、百年このかたの風俗を思ひくらぶるに、餘處の事をばおきて、江戸の人の風俗こそ、昔には、變りたれ。わが親しきものの中に、慶長・元和の頃、生れたる者、男にも、女にもあるが、それらの人々のはなしを聞くに、男は、冬、韋のうちかけ、韋の袴を美服とし、女は、紫の韋の襪子をはくを、よきけはひとせりと、いふ。その襪子は、わが幼き時まで、残りてありしなり。婦女の帯は、金襴を、美麗の限とし、黒地に、梅・櫻・松などを、ところどころに織りつけて、これを、鉢の木の帯と名づけて、珍重をけり。廣さ、鯨尺二寸ばかりの

韋
皮韋

鯨尺
吳服尺

曲尺

尋
訊

貞享
靈元天皇の
時。

紙を心として、綿などいゝることなし。四月より、八月まで、婦女の禮服に、錦にて、廣さ、鯨尺の八分ばかりなるを、うしろに、結びて垂るゝを、付け帯といふ。今の付け帯は、昔の常の帯よりも廣し。今の人に、昔の事を語れば、そらごとと思ひて、つゆ、眞とせず。これらは、我がまのあたり、見たりしことにて、つくり事にあらず。ふるき事知りたる人あらば、尋ね問ふべし。

すべて、男女の衣服、昔は、極めて、質素なりき。男子も、女子も、十四・五歳までは、長き袖を著くるに、丈は、鯨尺の一尺七・八寸を極とせしに、貞享の頃より、二尺ばかりになり、それより、やうやう、長くなりて、近き頃は、二尺四・五寸になりぬ

寛永
明正天皇の
時。

と見ゆ。婦女の帯も、貞享元祿の頃より漸、廣くなりて、今は、鯨尺にて、八・九寸に及べり。綿を心として、褥の如くす。男の肩衣といふは、昔は、麻の幅、鯨尺の八寸ばかりなりしに、貞享元祿の頃より、幅一尺に及べり。寛永の頃までは、婦女は、細き麻繩にて、髪を束ねて、その上を、黒き絹にて巻きしに、その後、麻繩をやめて、紙にし、越前國より、元結紙といふ物を造り出してより、海内の婦女、皆、これを用ふ。それより、絹にて巻く事もやみぬと、我が父、まさしく、これを見て、語りさかせつ。今の人聞きては、眞とせず。

およそ、男女の髮形、我等が見およびてよりこのかたも、幾かはりかゝつらむ。今は、昔の形も残らず。昔の婦人は、髪

多く長きを、たけにあまるなどいひて、ほめたりしに、近き

肩衣きいもの圖



かつきふりんの
婦人の圖
一尺の頃帯三寸
といふ是



綿糸の体

室礼頃の圖



貞享四年文つひ女
の頭巾のふりかへる体あり



頃は、髪の
すくなく
短きを、よ
しとする
風俗にな
りて、髪多
き女は、髪
の内を、或
は、切り、或

は、剃りて、すくなくす。この風俗は、京の婦女より、移り來れ

商估
商賈

粗暴
亂暴

り。この事に限らず。すべて、男女の風俗・詞づかひ・物の名ま
で、近き頃は、京に似たること多し。京は、公家の外、工匠・商估
のみなれば、人の心、柔和にて、利にさとく、江戸は、武家の都
なれば、あづまうどの心、粗暴にて、利にうとし。然るに、三十
年このかたは、江戸の人、京の風俗を學ぶゆるに、武士の心
も、昔に變れり。唯、京の婦女の、昔より、かつぎするのみこそ、
いまだ、江戸に移らね。江戸の婦女の、外に出づるに、昔は、き
まゝとて、黒き絹にて、頭面を包み、目ばかりをあらはしけ
るが、その後、綿にて、頭面を包みしは、わが二十あまり、寛永
の頃まで、あかなりき。今は、ちひさき綿を、頭上にいただけ
たるのみにて、面をば、打ちさらし、はれやかなる顔にて、道

冑
兜

裏(裏)

易

換更變

をゆくさま、おもはゆげにも見えす。男は、面をあらはすべ
きものなるに、この頃は、編笠の、肩の上までかゝるをかぶ
るは、珍しからず。冑のごとくなる帽子をかぶりて、面をか
くすもあり。常の頭巾に、覆面の如くなる物をつづりつけ
て、目ばかりをあらはして、道をゆくもあり。そのさま、昔の
女のごとし。人目を忍ぶものゝ、多くなりたるにや。又、この
頃の男は、小袖の裏を紅にし、あるひは、紅のはだぎぬを、袖
口長にして、腕をまとふばかりに、ひらめかすもの、多く見
ゆ。女は、かへりて、縹の白き裏などを著るなり。これらは、男
女、所を易へたりといふべし。(太宰春臺—獨語)

六、繪

繪そらごと

古のまことを傳ふること、書のみにはあらず。古き繪卷物などの、これかれ、残れるが、人の装束をはじめて、家居器物など、そのかみのさまの、いとよく、知らるゝは、また、文字の及ばざるところなりけり。若かはあれど、世に、いはゆる、「繪そらごと」といふことなきにしもあらねば、古の繪なりとて、ひたぶるには、より難きもあるべきを、そは、そのさまによりて、よく、見わくべきなり。かくて、後の世の繪師ども、かの繪所などいへるあたりは、その家の傳ありて、古の正しきあとに従ひて、おほかた、ものすめれど、なべての世のは、ただ、おのがむきく、筆にまかせて、書きなせるが、いた

跡 蹤蹟

恥 慚愧羞

く、さとびて、見る目も、いと、うたて、賤しく、遊びがたきが、多かめるを、また、やうやう、近き頃は、古のみやびを慕ひ、古き跡をたづねて、かきいづる人も、いで來にたる、これ、はた、何事も、ふるきにかへり行く、世の手ぶりなるべし。

近き世の繪師、倭のも、唐のも、そのすぢ、いと、多く、そのふり、さまざまに分れたるが、中には、筆の勢、ことに見えて、いと、はなやかに、をかしく書きなしたる、古にも、をさく、恥づべからぬが、見えゑらふめれど、猶、その心ばへは、いたく、下りて、古きには、かけても、及ぶべからざるは、世の人の心の、遙に、隔れるが故なるべし。今の世にして、古の跡のみ守りたらむには、萬にわたして、廣く、書きなし難く、なか

故きを温ねて
論語に、温レ故而知レ新、可ニ以爲レ師矣。

に、こちなきやうにも見ゆべければ、その趣により、今になへて、さまざま、心あらひすべきわざなめれど、それは、たいにしへの、高き心をば、おふなおふな、失はぬやうに、あらまほしきわざにこそありけれ。故きを温ねて新しきを知る」といふ、漢人の教は、よろづにわたして、思ふべき事にやあらむ。(中島廣足—檀園文集)

七、永田善吉

陸奥國岩瀨郡須賀川驛に、世々、紺搔を業とせし、永田昆山といふ人ありき。この人、好みて、山水人物などを、よく、描きしが、其の子善吉は、幼き頃より、父に學びて、畫をかき習

谷文晁

初は文朝、近世の名畫家、天保十二年歿す。

樂翁公

松平定信、陸奥白河城主。司馬江漢我が國洋畫の鼻祖、文政元年歿す。

ひ、年長けて、江戸の谷文晁の畫を見て、思へらく、余、死になむ時まで學びぬとも、此の人の上に立たむこと、難かるべし。いでや、古人のゑがかぬを、かき始めて、世に出でましものをと、志をおこし、此の時より、いたく、力を寫生に盡し、その名、やうやうに、著れしかば、弟に、紺搔の業を譲り、田善と稱へ、只管、畫かく事のみを、勉めたりき。

此の頃、賢明の聞ありし、白河の樂翁公、田善の繪を見て、深く、これを愛で、すゝめて、江戸に遣りて、司馬江漢につき、油繪を學ばしめられぬ。或時、公、和蘭國より贈りにし、日耳曼の都、ならびに、公園などを、銅版にゑりて、おしたる繪を、田善に示されしに、田善、その、眞に、精密なるに感じ、日夜、

技(枝伎)

工夫をこらし、遂に、こを摹して、ゑり成しぬ。公、其の勝れたるを賞し、長崎へやりて、銅版を習はしめ給ひしかば、其の技、いたく、進みたりき。我が國にて、銅版をゑる技は、田善よりぞ始りける。田善、又の名を、亞歐堂といへり。亞細亞、歐羅巴といふ義なりとぞ。

或人の言に、樂翁公、江漢と、田善と、二人の技を愛で、世には、長崎にて、技習はすと云はしめしかど、其の實は、和蘭の人を頼みて、二人を、歐羅巴につかはししなり。されど、此の頃、外國へ渡ることを、嚴に禁むる、國の掟なりしかば、いたく、こを秘めしがゆゑに、知る人なかりきと、いへり。さて、田善、長崎よりかへりしのは、士にとり立てられ、其の業に、

際限
究極

功をあらはしけり。文政五年に、七十二にてぞ身まかりぬる。(繪畫叢誌)

八、色

色の種類あること、際限なしといへども、和漢にては、昔より、青・黄・赤・白・黒を、五色と稱し、これを原素として、無数の色をなせり。例へば、青と黄とを合せて、緑を生じ、青と赤とを合せて、紫を生じ、赤と白とより、桃色を生じ、白と黒とより、鼠色を生ずるが如し。

物理学の試験によれば、日光は、三角玻璃を通過して、七色に分解す。即、紫紺・青・緑・黄・橙・赤にして、虹の色と、同一なり。

調合
配合
混和

皆無
絶無

貴重
珍重

緇
縹

然れども、繪具の調合には、青・黄・赤の三色より、他の色を生ずるを以つて、この三色を、原素の色、即、原色と稱し、他の色を、間色と稱す。又、白色は、七色の混合したるものにて、黒色は、色の皆無なるものなれば、いづれも、原色と稱せず。

色に就いて、人の表現する感情は、國々にて、種々、異なるべけれど、野蠻人は、一般に、赤色を好み、小兒も、亦、赤色を好み、和・漢・洋の歴史に、古代、紫色の貴重せられたるなどは、東西に通じて、著き事實なり。學者の言ふ所、一定せずと雖、要するに、白は、清淨、又は、神聖を表し、黒は、悲哀、又は、嚴格を表し、赤は、悅樂を表し、青は、幽鬱、紫は、浮華を表すと、いふ。

わが國の、神前の裝飾、淨衣、木綿緇、及び、婚儀の白無垢の

紋
紊

如きは、皆、白色を以つて、清淨・神聖を表するものなり。先年、和蘭女王の、婚儀を行はれたる時の服は、純白の薄絹に、銀と白玉とを、飾れる物なりき。又、わが國の、黒の紋服、西洋の黒の正服は、いづれも、嚴格を表し、わが鈍色の喪服と、西洋の喪章の黒紗とは、共に、悲哀を表せり。若き女子の服に、赤と紫との多きは、更に、説明するまでもなし。青は、幽鬱を表すと、いへども、一種、清涼の意味あるにあらざるか。夏の浴衣の藍色は、青天・碧海と、相映じて、袂涼しき心地ぞする。

かくの如く、色に、特有の長所ありて、それぞれの裝飾に、適すと、いへども、配合宜しからざる時は、或は、滑稽となり、或は、厭ふべき者となる。人、もし、大路を練りゆく、飴賣、また

は、廣告屋の服装を見れば、必、その適例を見出すべし。

色の配合の重なるものは、補色なり。たとへば、赤と緑とは、互に、補色なりと云ふは、日光の七色の中、赤を除きて、他の六色を合すれば、緑となり、緑を除きて、他を合すれば、赤となるを、謂ふなり。かくして、赤と、緑とは、補色なり。橙と、青とは、補色なり。黄と、紺、及び、緑と、紫とも、亦、補色なり。七色の順序にて言へば、補色は、互に、二色を隔てたりと、記憶すべし。補色を配合すれば、互に、見ばえして、愉快の感を起さしむ。緑と赤との調和は、最、強き趣ありて、花やかなれば、玩具・錦繪等の彩色に、多く、應用せられたり。萬緑叢中紅一點は、是、自然が示す所の、巧妙なり。これらの七色配合の外、彩料

愉
愈

點
(點、點、點、點)

佳良
善良

無數なるに随つて、配合も、亦、無數なり。美術・工藝家は、常に、心を、こゝに潜めて、室内の裝飾、衣服の色合、列品の配置を、工夫せり。例へば、紅と緑とは、調和、中位なれども、黄を濃くすれば、佳良となり、黄に、金光を發すれば、殊に、花やかとなる。赤地の錦は、即、この調和法を得たる者なり。かくの如き研究の區域は、實に、廣大無邊なり。

女子が、畫を學ぶは、只、能く、自然を寫すのみならず、色の調和を研究するに、大なる益あり。わが國は、古來、模様、の意匠に富めりといへども、色の調和の工夫に至りては、歐洲諸國に譲ること、實に、數等なりといふ。是、わが國人の、深く研究して、短を補ひ、長を助くべき所ならずや。(新保磐次)

九、動植物配合の美

自然界に生育する動物と植物との間には、或は、必須、若くは、偶然の原因に由りて、おのづから、離るべからざる關係を有するが如く、思惟せらるゝもの、少からず。これを研究するは、博物學上、最、興味ある事なるのみならず、文學、美術の上にも、亦、有益の事なるべければ、聊、諸子の爲に、これを語るべし。

思惟
思念
素
固

蜜密

昆虫は、花の蜜に養はれ、花は、また、昆虫の媒介によりて、花粉の傳達を受け、その實を結ぶもの多ければ、兩者間の關係の、至りて、親密なるは、素より、いふまでもなし。

分布
配布
分配

昆虫以外の動物と植物との關係は、さほど、密接ならねど、また、種々の原因によりて、おのづから、配合の妙あるもの、少からず。黄熟せる稻田に、雀の群集する、青々たる麥隴に、雲雀の下り居るなどは、更なり。果實の赤らみたる枝に、鳥のとまりゐて、これを啄まむとする、また、椋鳥、鶉、栗鼠、貂などの、木の實草の實を取り食ふは、人の、よく、知る所にし、て、即、これらの動物と、果實とは、また、一種の關係ありて、動物に、果實中の甘味を與へ、その種子を、諸處に分布せしむるものなれば、その關係は、花と蟲との關係に、異ならざるなり。

かゝる必須の關係にあらざれども、鶯の柳蔭にいこひ、

水黽
水馬
香魚
鮎年魚
往返
往返
往復

螢の浮萍に宿り、雨蛙・蝸牛等の、水邊植物の葉莖にすがり、また、池中に生ひたる蒲・莞・燈心草などに、赤蜻蛉の時々、來りてとまるなどは、水、または、濕地を好む動物の、水邊植物を利用するものにして、また、雁・鴨の、蘆洲に下り、鯉・金魚の、金魚藻・黑藻などの間を遊び、水黽の、蓴菜・萍の漂ふ水面を走り、香魚の急流を沂る等は、皆、水中、または、水邊の植物と、自配合を有するを知るべく、昆布・荒布の生ひ出でたる波間を、魚蝦の往返するも、亦、一種の奇觀と、いふべし。

鳥類が、種々の植物の中に、巢を造るは、普通の事にして、中には、ある、特別の樹木をのみ選びて、造るものもあり。また、ある樹木には、或種の鳥の、まばく、來るるを目撃し、ま

適合
適當

た、ある鳥の來る時季と、ある植物の花、もしくは、實のある時季と、相一致するが爲に、偶然に、その鳥と植物とを、合せ見る機會多く、随つて、その間に、一の聯想を起すが如き類も、少からず。從來、わが國の詩歌・繪畫に現れ、また、他の美術・工藝品の上に用ひらるゝ、梅に鶯、松に鶴、枯木に鳥、柳に鶯などの對は、これら、動植物の性質・形態の、おのづから、適合する所あるがためなるべけれど、また、前述の如き原因によりたる事は、疑ふべからず。

其の他、雉・山鳥の、灌木の叢に巢くひ、鶉の、尾花の蔭に隠れ、雉の、花園の間に緩歩するが如き、さては、荒野の狐、深林の熊・狼、高山のはひ松と、雷鳥との如き、はた、熱帶地方の、椰

考察
觀察
視察

第三度期

子・紅樹の茂生せる河邊に、鰐の眠りたる、印度の山野の藪中に、虎の潛みたる、サハラ沙漠中の小灌木下に、獅子の蹲れるなど、いづれも、その處に應ずる、兩界、自然の配合にして、兩者、互に、相俟ちて、始めて、その天然の特性を發揮するものと、いふべし。かくの如くなれば、苟、畫家・文學家等の、自然界の美を顯さむとするものは、須らく、この間の消息を、考察せざるべからざるなり。(三好學—植物學講義による)

一〇、潮の八百路

廿八日、金曜、昨夜半より、波靜に、今朝、見れば、船は、葡萄牙の鼻を廻れり。望樓あり。燈臺あり。セント、ヴィンセント岬燈

切
截
斬
斫
伐

翅
翼

臺を過ぐれば、彼よりも、我よりも、互に、旗をおろし、敬禮して過ぐ。それより、引きつづき、サガレス岬の前を経て、東方にと、すゝみに進む。海、やゝ、狭く、波、ますます、平らかなり。人、うち悦び、互に、眉を開きて、甲板に上り集ふ。

今、見ゆる一帯の陸地は、葡萄牙アルガルヴ州なるべく、岩石は、楯の如くつらなり、上部は、一直線に切られたる、さながら、人工の如し。その色は、赤樺にして、草もなく、木もない。深綠色の波は、白雪の如き泡沫を飛して、絶えず、この赤壁を洗へり。無邪氣なる鷗の群は、その翅に、幾多の人々の思を載せて、常に、この岸と波との間を、翱翔せり。

帆前船見え、汽船走る。その中に、我が博多丸に行き逢ひ

躍
跳・踊

無雙
無比
無類

しこそ、身も躍らるゝばかりに、嬉しかりしか。固より、聲も聞えざれども、帽子うちふりつゝ、日本萬歳を唱へし時は、彼も、同じ思にや過ぎつらむとぞ、思はれし。げにや、今より一世紀以前には、かの見ゆる葡萄牙國は、世界無雙の海上權を得たりしにあらずや。我が國の如きは、彼が爲に指導せられ、彼が爲に開發せられし事、少しとせず。然るに、今は、彼は、足の痺れたる蟹の如く、我は、雲を得たる龍の如し。彼の國の人たるもの、我が國旗の輝きわたるを見ては、いかなる感をか起すらむ。

午後十時を過ぐる頃、海は、やうく、狭くなりぬ。見れば、既に、ジブラルタルに入りて、トラフルガルにさしかゝり

聯
連列

たるなり。兩岸の燈火、點々、相聯れる、晝よりも、なかくに、見どころあり。弦月の影の、波にゆらるゝなど、そぞろに、懐古の情にたへず。(池邊義象—佛國風俗問答)

一一、蔚山沖海戰ノ公報

十四日
明治三十七年
八月
出雲艦長
海軍大佐伊地知季珍
吾妻艦長
海軍大佐藤井較一
常磐艦長
海軍大佐吉松茂太郎
磐手艦長
海軍大佐武富邦鼎
擁護
掩護

十四日、出雲、吾妻、常磐、磐手ハ、韓國蔚山沖ニ於イテ、索敵行動中、浦鹽艦隊三隻ノ、南航スルヲ發見セリ。敵ハ、我が隊ヲ見ルヤ、北ニ向ヒ、遁走セントスルヲ以ツテ、直ニ、其ノ前途ヲ扼シ、午前五時二十三分ニ至リ、戰鬥ヲ開始セリ。敵ノ殿艦リュールックハ、常ニ、後レ勝ニテ、斷エズ、激烈ナル砲火ヲ被レリ。前續二艦ハ、屢、勇敢ニ、之ヲ擁護シ、遠ザカレバ、轉回

遁走
逸走

浪速艦長
海軍大佐和田
賢助
高千穂艦長
海軍大佐毛利
一兵衛

シテ之ニ近ヅキ、近ヅケバ、又、前進セリ。依リテ、我ガ隊ハ、屢、
丁字形ヲ畫キテ、敵ニ集彈スル利ヲ得タリ。其ノ結果、敵艦
ヲシテ、何レモ、數次、大火災ヲ起シ、多大ノ損害ヲ負ハシメ
タリ。特ニ、リューリックノ如キハ、遂ニ、進退ノ自由ヲ失ヒ、砲力
モ、亦、全滅ニ近ヅキ、時々、緩漫ナル發射ヲ爲スノミニシテ、
其ノ艦尾ハ、著ク、沈ミ、且、少シク、左舷ニ傾斜スルヲ見タリ
シガ、敵ハ、遂ニ、之ヲ捨テテ遁走セリ。恰、好シ、第四戰隊、戰場
ニ近ヅキ、浪速、高千穂ノ、リューリック攻撃ニ進ムヲ見タルヲ
以ツテ、本隊ハ、ロシヤ、グロンモボイヲ追撃セリ。此ノ間、激
戰、約、五時間ニ及ビ、敵ノ二艦ハ、全速力ヲ以ツテ逸走ス。午
前十時十九分、我ガ戰隊ハ、右舷ニ回頭シ、リューリック搜索

旺盛
隆盛

ノ爲ニ、南航セルニ、リューリックハ、遂ニ、沈没セリトノ報ニ接
シタルヲ以ツテ、直ニ、全隊ノ集合ヲ命ジ、其ノ沈没位置ニ
至リ、浮泳セル人員、約、六百名ヲ救助シ得タリ。我ガ艦隊ハ、
多少ノ損害ヲ受ケタレドモ、何レモ、重大ナラズ。士氣、極メ
テ、旺盛ナリ。今回ノ戰鬪ニ於イテ、重大ナラザル損害ヲ以
ツテ、多少ノ効果ヲ收メ得タルハ、偏ニ、大元帥陛下ノ御稜
威ニ因ルモノニシテ、一同、感激ニ堪ヘザル所ナリ。

(官報)

(備考)當時、第二艦隊司令長官は、海軍中將上村彦之丞、出雲に、司令官海
軍少將三須宗太郎は、磐手に坐乘せり、又、第四戰隊司令官は、海軍中將
瓜生外吉なり。

紹
嗣・續・繼

一一一、カミとマゴコロ

我が國民の精神には、太古より、明らかに、君臣の分が定つて居る。天孫の御血統が、すなはち、帝位を紹ぐべき種で、その餘のものは、皆、この國土に居て、その下に、服従すべき種と、定つて居る。皇室は、一種、別なものである。我等國民よりは、一段、高いものである。これは、カミである、長上である。神である。カミといふ語は、すべて、上にあるものを、意味する。今日でも、宮中では、陛下の御事を、お上と唱へ奉るのである。又、昔から、現神、現人神と申すは、すなはち、現在、生きてお出でなさる神と、いふ意である。漢字で書けば、神と、上とは違ふが、國語では、區別がない。

本家
宗家

翼贊
贊襄
輔翼
統領
總領
統帥

皇室を敬ひ奉ることは、この通であるが、ただ、神として、畏れるばかりではない。皇室の事を、オホヤケといふ。大家の義である。皇室に對しては、我等は、小家である。すなはち、皇室は、我等の本家であるといふ考がある。この思想の中には、皇室と國民との間に、多くの、親愛の意味が、籠つて居る。統治者と被治者と、いふ問題ではなくして、心の底から、上下、互に、親睦して居る趣がある。八百萬の神は、皇孫の事を、翼贊する人々ばかりであるが、義理づくに、服従して、おそれて居るのではない。大本家の統領として、親分として、尊敬して居るのである。親子的關係が、成立つて居るのである。親の命令は、子として、聽かねばならぬ。親の心を喜

ばせねばならぬ。親からは、何を與へられてもうれしい。親子の愛情は、人の至情で、これが、マゴコロである。このマゴコロが、即、忠である。忠といふ語は、漢字の音であるが、日本に譯せば、マメゴコロ、つまり、マゴコロの外はないのである。日本では、忠も孝も、同じ事で、どちらにも、同じく、マゴコロである。

このマゴコロを以つて、皇室に對するが、國民の情である。神のやうに尊んで、神のやうに畏れ、親のやうに頼にして、親のやうに、ありがたく思ふ。それ故、天皇の命とあれば、どんな事でも、服従する。どんな事でも、言付を聽く。いやいやするのではない。有りがたがつてするのである。土地返

上などは、愚なこと、身命も、喜んで、差出すのである。

海ゆかば
萬葉集、大伴
家持の歌の句

海ゆかば、みづく屍、山ゆかば、草むす屍、大皇おほみかの、へにこそ死なめ。かへりみはせじ。

寇(寇)

舉國
闔國
全國

といふ、奉公の精神は、即、こゝで生ずるのである。いはゆる、大和心も、このマゴコロを、いふのであらう。元寇の役に、大敵を追ひ拂つたのも、このマゴコロの爲であらう。兄弟墻に、鬨いでも、いざとなれば、舉國一致、外侮にあたるといふ精神、この皇室を保護し、この國土を維持しようといふ精神、すなはち、マゴコロは、困難のあるごとに、たちまちに、發現して来る。ただ、このマゴコロの精神が、萬世一系の國體を、成した原因である。東洋唯一の大強國となつた所以で

ある。(芳賀矢一——國民性十論)

一三、萩の戸の月

我が日本臣民は、宇内各國に比類なき、帝室を戴けり。かくいへば、讀者の腦髓には、必、萬世一系の皇室たる事を、思ひ出でむ。固より、さることなれども、今、余輩が、特筆して、宇内に比類なしといふは、現在の我が天皇陛下の、叡聖仁慈にわたらせ給ふ乾徳にぞありける。余輩は、敢て、筆舌を弄びて、溢美の言をなす者にあらず。爰に、其の事實の二三を擧げて、前言の誤らざることを證せむ。惟ふに、九重、雲深し。余輩、草莽の民、いかでか、悉、窺ひ知る事を得む。ただ、年來、

特筆

特書

宇内

世界

天下

惟

思憶想

懷

傳傳

心にとめて、傳へうけ給はれるはしばしを記すのみ。

申すもかしこき事ながら、余輩が、漏れ聞く所によれば、

憲法云々
明治二十二年

憲法草案の、樞密院の會議に附せらるゝや、凡、四箇月の久

しきに亙りぬ。此の間、毎日、五時間ばかりの議事なりしに、

陛下には、午前十時に、必、臨御ありて、玉座につかせたまひ、

議官等の參集遅き時などは、まゝ、侍従を以つて、御催促あ

らせられし事もありき。かゝれば、議事に、深く、叡慮をとど

めさせ給ふことは、申すまでもなし。會議の日に、御闕席仰

せ出されしは、僅に、陸軍戸山學校へ行幸の日、一日のみな

りきと承る。されど、その時は、樞密院にても、議事を見合せ

られたりとぞ。

叡慮

宸慮

宸襟

軫念

昭宮
猷仁親王、
廿年八月廿日
誕生、廿一年
十一月十二日
薨。

天機
天氣
御氣色

七月中旬に至り、夏期休業の後なれば、官吏は、賜暇の惠に浴して、避暑旅行など、思ひおもひに、企つる時に、陛下には、炎熱やくが如きをも厭はせられず、午後三時すぎまで、續いて、會議の席に臨御あらせられたりとぞ。又、議院法の議事の折かるとよ。昭宮薨去の事、侍従より、上奏ありければ、議長は、議事を中止すべしや」と、伺ひ奉られしに、陛下には、「かまひなく、議事をつづけよ」と、仰せいだされたり。されば、議長は、議事の一段、濟みて後に、始めて、散會を宣言したりと、いふ。

いとも、かしこく覺ゆるは、時ありて、政海不穩の時には、何となく、天機すぐれさせ給はず、常の供御も、減ぜらるゝ

事あるよしに承る、明治二十四年の春の第一期議會において、豫算會議の議事、いまだ、結局に至らざりし時は、日々、議院の狀況の報告を聞しめされ、深更に至りても、電話の報告を、大輿に上奏し奉りたりと、いふ。憲法政體の初年なれば、其の結果、いかがあらむと、深く、宸憂あらせられし御事と、察し奉らる。

豫算の議事、穩に、結了を告げたりとの報知をきこしめさるゝや、天機、殊に、うるはしくて、岩倉、并に、諸臣等の、憲法政體に憂慮たりしものども、今は、地下にて、安堵をまつらむ。速に、その墓所に、使を遣して、知らせよ」と、仰せ出されたりとぞ。此の御詞を承る者、誰か、感泣せざらむや。

憂慮
痛心

なほ、うけたまはる所によれば、陛下には、日々、表御殿に出御あらせられて、諸大臣の拜謁仰せ付けられ、又、政務上の文書、御閲覽あらせられ、さて、午後三時前後（暑中は、十二時までに）、はじめて、大奥に入御あらせらるといふ。入御の後とても、緊急の事あれば、上奏をきこしめし、夜に入りても、文書に、御親署あらせらるゝ事ありとぞ。

推究 討究 研究
允裁 裁許 裁可 允可

御閲覽の時は、一々、仔細に、御推究あらせられ、もし、御疑點ある時には、それぞれの筋へ、御下問あらせられ、若かる後に、御允裁あらせらるゝ由なり。陸海軍の上奏に至りては、大元帥の天職をつくさせ給ふとにや、最、仔細に、御閲覽あらせらるゝよしに承りぬ。かくまで、政事上に、終日、乾々

容 入納

の聖徳あらせらるれども、亦、立憲政體の大義を重んぜさせ給ひ、大かた、内閣各大臣の言を容れさせ給ひて、彼の外國の君主が、時に、自、聰明を銜ひしが如き御事は、つゆばかりも、おはしまさずと、いふ。

かくばかり、萬機の政に、宵衣旰食の御勞を、みづからさせ給へども、先帝の御遺詔を守らせ給ひて、代々に傳へ給へる、敷島の道には、折にふれて、御心をよせさせ給ふと受け給はる。ある時、述懐の御製とて、

いにしへの文見るたびに、思ふかな。

おのが治むる、國はいかにと。

又、月不擇所、といふ御題にて、

萩の戸の花にやどれる、月かげは、

賤が垣根も、へだてざるらむ。

と、あそばされぬ。一視同仁の御心、いとも、かしこし。かくばかり、思はせ給ふ大御惠の露におきふす青人草は、誰か、其の袂をゑばらざる。(池邊義象)

青人草
蒼生

一四、伊勢神宮の尊嚴

八日、空、いとよく晴れて、一點の雲もなし。上は、午前七時三十分のいでましにて、外宮に詣でさせ給ふべきよし、よべより、仰せ出されたれば、おのれらは、それより先に、行在所に参りたり。やがて、御輦出で立たせ給へば、御あとより、

八日
明治十三年
七月
晴
霽

御供仕うまつりぬ。御輦、外宮の參集所に到りつかせ給ひ、ゑばしの程、息はせ給ひ、程なく、詣でさせ給ふ。御供の人々、此の處よりは、悉、かちにて、御供仕う奉れり。宮の御門にて、下りさせ給ひ、宮つかさ導き奉る。御拜はてさせ給ひて、御供の人々、皆、うちつれ、庭まで進みて、拜み奉る。

大宮は、御山の入口より、僅に、三町ばかり行きて、右の方に、神門あり。大宮づくりのさま、神さびわたりて、尊しとも、かしこしとも、いはむ方なきに、千枝の杉を、吹き渡る風の音さへ、すがくしく、折しも、ほととぎすの、うち鳴きわたりたる、ところからは、まして、あはれ深う、其の様、言葉にも盡し難し。

鳥居
華表

かくて、又、もとの參集所に還らせ給ひ、午前九時、宇治の内宮の方に、御輦進めさせ給ふ。まばしの程に、あひの山を越えて、宇治に著かせ給ふ。五十鈴川あり。渡せる橋を、宇治橋といふ。この橋の、渡らむとする處と、渡りはてたる袂とに、鳥居立てり。それより、橋を渡りて、右に折れ、又、板橋を過ぐれば、内宮の域内にて、天照大神の鎮りまします地なり。森深く、水清う流る。此の内宮の參集所に息はせ給ふほど、やゝ、久しければ、そのひまに、おのれらは、此の御手洗の川水に、身を清め、手洗ひ、口そゝぎて、待ち奉りぬ。かくて、詣でさせ給ふ事、外宮の如し。おのれらも、遙に、うなねつきつゝ、をろがみ奉れり。

抑、二所の大宮は、尊きこと、上なき所にて、森のさま、幾千年經にけむと見ゆる杉檜など、木深く茂り、まことに、世の外なる境にて、もの深く、尊げなる事、いふばかりなし。されば、物ゑらぬ田舎人も、こゝに詣で來れば、自、額づかるゝぞ、怪しきや。かゝる所に、まかも、御供仕う奉りて、詣づる事は、いかなる身の幸にかと、吾ながら、いと、かしこうのみ覺ゆるにも、大御代の御榮を、祈り奉るより外なむなかりける。

神風の、伊勢の内外の、宮ばしら、

固めて立てし、御代は動かじ。

(池原香榭—美登毛酒敷)

一五、農人形

水戸の常磐公園は、わが邦、三公園の一と稱せらる。その、小高き丘陵に立つときは、仙波沼を隔てて、遠く、一帯の郊野を、雙眸の中に、收むることを得べし。園は、烈公德川齊昭の創築せし所に係り、名づけて、偕樂園といふ。蓋、民と偕に樂む」と、いふ義に取れり。されば、四時、常に、士民の來り遊ぶに任せ、綠陰、花下、行厨を開きて、一日の歡樂を盡さしめ、月下、風前、瓢を傾けて、一夕の清遊を、縦にせしめたりと、いふ。公園には、今も、なほ、素焼の人形を鬻げり。その形や、結髮の老農が、積藁の側に盤坐して、笠を、その前に置けるなり。製法、極めて、粗なりといへども、亦、頗、雅致に富めり。世人、呼

三公園
命澤の兼六公園、岡山の後樂園とを併せて云ふ。
 雙眸
 兩眼
 民と偕に樂む
孟子に、古之人、與、民偕樂、故能樂也。
 行厨
 破子
 辨當
 鬻
 販

んで、烈公の農人形」と、いふ。



農人形

亭に登臨して、親しく、稼穡の艱難を察しぬ。嘗、銅を以つて、農人形を鑄しめ、常に、これを、座右に置けり。その、食膳に向ふや、必、まづ、初穂の意を以つて、一箸の飯粒を、これに供へ、然る後に食するを、例とせりと、いふ。

ある時のことなりき。齊昭は、朝な朝な、飯食ふごとに、忘れじな

めぐまぬ民に、惠まるゝ身は、

居常
 平常
 平生

供
 備具

百姓
萬姓
農民

先哲
先賢

といふ、一首の和歌を、侍臣に與へて、いへらく、古より、賢君は、民を見ること、なほ、慈母の、赤子に於けるが如しと、いへり。されど、われは、少しく、これと異にて、百姓をば、わが乳母なりと思ふ。われは、これまで、百姓に向ひて、何等の惠をも施さざれども、百姓は、わが爲に、命を繋ぐべきものを貢ぎぬ。その恩や、乳母と、何の擇ぶ所かあらむと、爾來、侍臣等は、農民を呼びて、御百姓と、いふに至れりとぞ。今、鬻ぐところの農人形は、蓋、これを模造せしものなり。先哲の、意を勸農に用ふるや、亦、懇到なりと、謂ふべし。(田園都市)

一六、格言

一、一農耕サザレバ、民、コレガ爲ニ、飢ウル者アリ。一女織ラザレバ、民、コレガ爲ニ、寒ユル者アリ。(管子)

一、食ハ、必、常ニ飽キテ、然ル後ニ、美ナラムトナ求メ、衣ハ、必、常ニ、暖ニシテ、然ル後ニ、麗ナラムトナ求ム。(墨子)

一、樹、靜ナラムト欲スレドモ、而モ、風、停マズ。子、養ハムト欲スレドモ、而モ、親、待タズ。往キテ來ラザルモノハ、年ナリ、再、見ルベカラザルモノハ、親ナリ。(孔子家語)

一、身體、髮、膚、コレヲ父母ニ受ク。敢テ、毀傷セザルハ、孝ノ始ナリ。身ヲ立テ、道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚ゲテ、以ツテ、父母ヲ顯スハ、孝ノ終ナリ。(孝經)

一七、少女緹縈

漢の世、齊國の太倉令、淳于意が女緹縈は、幼より、至孝にして、氣節あり。同胞五人、皆、女兒のみなりき。

犯 侵冒
罵 詬嘗
手段 方法 手立

ある時、淳于意、犯せる罪ありて、刑せらるゝ事に決しぬ。かくて、長安の獄に繋がれむとて、捕はれ行く時、泣き悲しめる女兒等を顧みて、歎き罵りて云へるやう、あはれ、我は、五人の子持ちたれど、男兒といふもの、一人も持たねば、かかる時には、何の用にも立たぬなり」と、口の中に、うち呟きけるを、少女緹縈、洩れ聞きて、いと口惜しき事に思ひ、女なりとも、父を救ふ手段、なからずやとはと、獨、心にうなづき、はふり落つる涙を拂ひ、後れじと、父があとを追ひて、長安に

至り、時の天子孝文帝に、書を上りて、

廉平 廉潔
法度 法令
又 復亦

「我が父、太倉令となりしより、齊の民、みな、其の廉平を悦べり。然るに、今は、はからずも、上の御法度に違ひて、罪を得たること、いと、畏きことながら、又、まことに、悲しき事なり。はや、重刑に處せらるべしと、承り候ふが、凡、死せる者は、復、生くべからず、刑せらるゝ者は、復、舊の體にかへすべからず。よし、其の者が、過を悔い、改めて、善に移らむとすとも、また、いかにとも、すべきやうなし。されば、願はくは、わらはが身を終ふるまで、官婢となりて、事へまつり、父が罪を贖ひ、みづから、よく、過を改めて、新にする道を得しめなむことを。聖明の天子上に在します、いかで、

奴隸
奴婢
奴僕

少女が願を、聞召し入れさせ給へ。」

と、歎きけり。官婢とは、一生、みづしとなりて、宮中に入り、下働して、身を終ふる者。即、金にて買はれたる、奴隸と、同じものなりとぞ。文帝、この上書を御覽ありて、深く、少女緹縈が孝心を感じ、即、詔を下して、曰はく、

「むかし、舜帝の時は、罪ある者には、異様のあるしある、衣服を被させ、これを、衆人に示して、辱められたるのみならず、されど、見る人、深く恥ぢて、みづから戒め、罪を犯す者、極めて、稀なりきと、聞く。かゝるをこそ、まことの至治の世とは、いふなれ。今や、法嚴にして、死罪に行ふこと多く、肉刑に、五等を設く。かくして、惡を懲さむとするに、却

赦
免許

増
益

りて、罪惡を犯す者、益、多し。これ、實に、朕が不徳の致す所なり。罪を犯す人を咎めむよりも、まづ、朕、自を責めざるべからず。朕は、かゝる孝女に對して、痛く、自、恥づるなり。緹縈が志を、憐み、且は、愛でて、父が罪は、赦すべし。

と、かくて、その罪を赦されたるのみならず、刑法の重きは、民の煩を増すものなりと、こゝに、舊き法を改められ。且、肉刑を除く詔を下し賜ひぬ。

緹縈、少女の身を以つて、免れ難き、父が罪を赦され得つるのみならず、世にも、おそろしき肉刑を廢する、善政を行はしめぬ。至誠の力は、げに、大なるものなりけり。

(下田歌子—外國少女鑑)

一八、蘇武 (坪内雄藏)

風颯々の、秋ふけて、

節旄かろく、命おもし、

千里萬里の、路越えて、

ふかく匈奴の、國に入る。

野邊の草木や、鳥の聲

聞く物の音も、見る色も、

いづれか夷の、物ならぬ。

思へば遠く、來つるかな。

流れゆく水、おとたてて、

胸にうれひの、波たかし。

故郷母あり、雁鳴きて、

老の寢覺や、いかならむ。

よしや幾夜の、草まくら、

旅寢の空に、果てぬとも、

國家のために、盡すべし。

君命おもく、身はかろし。

かうと覺悟は、定りぬ。

使命つぶさに、傳へつゝ、

匈奴の王に、面接し、

蘇武は國書を、呈しけり。

固より非道の、王なれば、

國書の旨意は、聽かざれど、

挺身敵地に、使せし、

蘇武が勇氣を、惜みつゝ、

或時蘇武を、召しよせて、

「降り仕へよ。若かあらば、

おもく汝を、もちひむ」と、

説き諭せども、聽かざれば、

國王大に、いかりをなし、

蘇武をとらへて、荒山の、

岩^{いは}窖^{がう}の中に、幽閉し、

窖(窟)

膚
肌

食を與へず、くるしめぬ。

頃しも北風、雲を吹き、

寒さ膚を、つんざけり。

飢うれば氈毛を、雪に和し、

いのちを繋ぐ、料となす。

日數経れども、死なざれば、

えびす等怪み、かつ怖れ、

此度は蘇武を、野に移し、

羊のむれをば、守らせて、

「雄羊はらむ、ことあらば、

放免せむ」と、あざけりぬ。

無念
殘念

覺悟は去ても、無念さに、
 眠られぬ夜も、いく度か。
 ひと夜雲なく、月すみて、
 秋ももなかの、空のいろ、
 せめてはかくて、ある事をと、
 雁に託せし、筆の跡。
 かくて春去り、夏きたり、
 また秋の風、冬の霜、
 落葉々々の、かさなりて、
 十有九年、ゆめの間や。
 老いて屈せぬ、忠節を、

天助けてか、不思議にも、
 雁の使の、かひありて、
 たのしき便ぞ、聞えける。
 國と國との、和議成りて、
 蘇武は赦され、歸りしが、
 立ち出でし時の、黒髪は、
 いつしか雪とぞ、なれりける。

一九、岩倉公の逸事 その一

月日の小車は、めぐりめぐりて、流るゝ水よりもはやく、
 故右府公の世を去り給ひしより、今は、はや、十年あまりぞ

史人
史家

過ぎぬる。大詔のまに／＼、わが國を、富嶽のやすきに置か
でやはと、思ひ入り給へる、公の一筋の誠心は、天地の間に
充ちわたりて、きはみなき後の世まで、語りつぎ、聞きつぐ
べければ、今更に、いふまでもなき事ながら、公の逸事の二・
三を、思ひ出づるまゝに、書き記して、後の鑑ともし、史人の
料にもせむとす。

復
反・返・回

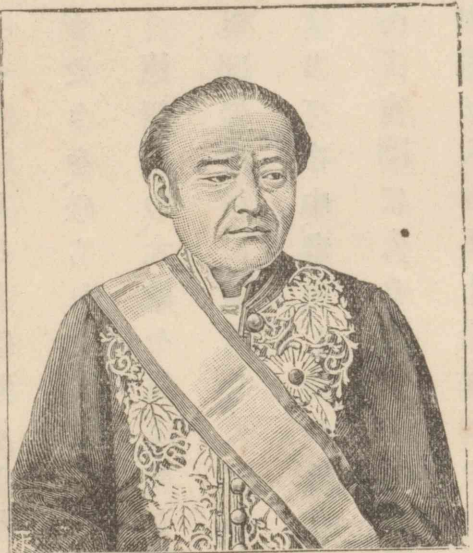
維新のはじめに、神武の古に復るといふ、大義を定めら
れしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の
説に、建武中興の振はざりしは、當時の摺紳に、その人なき
によれり。源親房卿は、學識ありて、時の帝の御おぼえもめ
でたかりしかど、その人の所見は、延喜天曆の跡に復るに

摺紳
公卿

隙
罅・罅

ありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ、公家・武家の
間に、隙を生ぜしなれ」といへり。

達觀
通觀



故右府公は、摺紳有職の
家に、生ひ立ち給ひしかど、
夙に、大勢を達觀して、王政
に、公・武の別なきことを看
破し、中興の實を擧ぐるた
めに、神武の古に復るとい
ふ、一大義を唱へ給へるは、

これぞ、明治の朝廷に、人ありとは申すべき。その一大義は、
百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來、千有餘年間の磐

根錯節は、すべて、破竹の勢を以つて、破れたり。世の人は、明治の中興は、五百年來の、武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて、天平以來の宿弊の、さらに、破りがたきを、破られたることと、知るならむ。

徳川氏の、大政を返上せし際には、公は、譴を蒙りて、久しき間、岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に、召によりて、夜中、參内し給ひけり。このをり、公は、一の大囊を携へて、宮門に入り給ひしが、囊中の文書は、皆、公の、蟄居中に、計畫せられて、玉松操といふ人に、起草せしめられつる、復古經綸の策案なりき。

この時、大勢、尙、定らずして、物論、紛々たるに、公は、俄に、躬

蟄居
屏居

物論
物議

朝議
廟議

洪圖
洪謨

請謁
內請

を以つて、責に當り、從容、應答して、雄藩の主も、爲に、容を改め、朝議、大に、決するに至れり。而して、大詔、一度發して、外は、將軍を廢し、内は、攝關、議奏、傳奏を廢し、親政の洪圖を、旬日の内に、定め、後世、動すべからざる基礎を、建てられたるは、實に、公の、輔翼の力なり。就中、復古の第三日に、禁闔に、達文を、掲げられて、女房の請謁を、納るゝ事を、痛く、禁止せられたるは、これぞ、數年の宿弊を、除き、將來のために、一大美事を、遺したるなる」とて、公の、晩年に、親しく、物語を、給ひき。この一事は、扇の要なりとは、知る人ぞ、知らむ。

玉松操は、一の偉丈夫なりき。平生、聲色を、近づけず、酒肉を、嗜まず、書を、讀むを、樂とし、夙に、神武復古の、説を、抱きぬ。

畫策
計畫

履歷
經歷

偶、公に知られて、蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして、畫策するところあり。公は、玉松の功を推して、「おのれの初年の事業は、皆、彼の力なり」とまで、のたまへり。薨去の前年に、一夕、ことさらに、余を召して、玉松の履歷を物語し給ひ、その人の功績を、空しくなせそ。書き記して、後の世の、かたりつぎの料とせよ」と、懇に、仰せられけり。この夜、余は、他の二人を誘ひて、俱に、侍りしが、その中の一人は、もれなく、公の物語を、筆に留めたり。おのれの功を推して、人に譲りたまふこと、大臣として、いと、めでたし。

その後、公の、朝廷に、勧めまゐらせて、斷然、開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は、「姦雄のために、誤られたり」との

大久保
利通
木戸
孝丸
小松
帶刀
廣澤
眞臣

一語を、いひ放ちて、公の許を辭し、召されても、更に、應ぜず、一室に、屏風をたて籠め、その中にて、讀書に、日を送りけるが、功を論じ、賞を頒つ日に逢はずして、世を去りぬるぞ、なげかはしきと、公の、のたまひし。公は、蟄居して、いましなから、その家の裏の隠戸より、人知れず、大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を引き、内外の大勢を聞かれなどして、この時、すでに、鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は、露程も、この事を知らざりけり。彼が、口惜しく思ひつるも、理なり。

維新の後、公の翼贊の功は、明治の歴史と共に、後の世に傳ふべきなれば、こゝに、書きつづくる要なけれど、公は、お

のれの勞を、露ほども、誇りがほに、人に語り給ふことなかりし程に、史人も、得知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と、二十二年との、條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しく、いひはやせど、この事のおこりは、十五年にて、公は、飽かず思召すことありて、一方ならず、心を盡したまひ、そのをり、一たび、中止とはなりぬ。されども、公は、深く、秘め給ひて、文書一箱ほどもあるを、家に藏めて、出さざりしかば、内々の人ならでは、知るものなかりき。これ等は、後人の鑑にこそ。

剛膽
大膽

剛膽は、政事家の第一要徳なりとぞきこゆる。公は、長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の徳を備へおはしけり。征

汗(汗)

韓の議、今にも、蕭牆の内に、變亂を見むとする時に、陸軍將校の中にて、武勇のきこえある一人は、公の邸に參り、客室に謁見し、一應二應、議論の末、その人、怒れる眼、血をそゝぎ、毛髮、倒に豎ち、長き脇差を、左の手にて、鞘もたわむばかりに、握りつめ、貴殿、もし、意見を枉げ給はずば、御身のため、あしかりなむ」と、いひ放ちつゝ、膝と膝との間、一尺ばかりにまで、つめかけたり。この時、公の家の侍ども、次の間に、控へ居て、障子の隙より、窺ひつゝ、あはや」と、手に、汗を握りたりしに、公は、すこしも、動ずる色なく、自若として、その座を守り給ひきとぞ、内の人の物語りし。

公の、かしこきあたりの御おぼえ、殊に、めでたかりしは、

君臣水魚
蜀志に、先主
曰、孤之有孔明、猶水之有魚也。

世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて、人はあらしと、思ひ給へる、隠きはぬ、明き心の深かりしは、これぞ、君臣水魚とも、申し奉るべきか。雲の上の事は、筆に載するも、かしこければ、洩しつ。

二〇、岩倉公の逸事その二

公は、大久保故内務卿と、神交、特に、深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は、密々、往復、あきりなりしが、公の身の上、心もとなし」とて、夜なく、年少き侍を遣して、守衛せさせつることありしを、公は、知り給はざりき。西南の亂平ぎて後、兩公の間に、契り給ふ事ありしが、日ならざるに、

西南の亂
明治十年西郷
隆盛等の亂。

料
圖計測

大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、世の人、大久保の志を知りたらむには、いかばかりか、哀み思ふらむ。維新のはじめの十年間は、創業撥亂の時なりき。是より後の十年こそは、内治を整理し、民利を進むる時なれとて、將來のために、大に、計畫するところありしに、料らずも、かたみの言葉とはなりぬと、のたまへり。

公は、夙に、開國の國是を唱へ給ひつゝ、又、厚く、國體の基礎を重んじ給ひ、晩年、公の奏上によりて、宮内省に、帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを、世に知らせむ爲の、はからひとぞきこえし。

公は、勤儉の二字を、大政の本として、輔弼に、心をつくさ

台鼎
三公

家範
家憲
家法

執
取探

調印
捺印

碎
摧

せ給ひき。又、家を治むるにも、儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時を、な忘れそとて、常に、公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで、守り文にせよ、とて、子孫に、遺し給ひしが、その附録一篇は、專、奢侈と遊惰とを戒め給ひ、おもき病の床にましましつゝ、親しく、旨を授けて、侍ふ人に、筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が、案文に調印せしは、七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今は、の際に、遺言ありて、おのれの墓石は、父君の墓石の寸法に準へよ」とありきとなむ。

公は、日に夜に、公の事にのみ、心を碎きて、寸時も、暇あらせ給はざりき。朝五時前には、目を、覺し、侍やある」と、聲かけ

代筆
右筆

させ給ひ、今日は、何某をば、何時に召せ。次に、何某をば、何時に呼べ。又、明日は、何某に、朝何時に來れ。何某に、夕何時に參れと、記して、申しつかはせなど、仰せられき。多くの公達は、父君の代筆として、文かくことに、忙しかりきとぞ。

公の、病に侵され給ひつるは、明治十六年の春なりしが、後より思へば、十五年の頃より、なにとなく、あらざらむ後の世の、心づくしの節々を、知る人に、語らせ給ひしことぞ、多かりける。同じ年の冬、ある人の許に、贈りたまへる書の末に、

さりともと、かきやる浦の、藻鹽草、

誰がおり立ちて、かづきあぐらむ。

と、ありき。さきだつても、後るゝも、世の習とはいひながら、御國のために、行末を思ひやられし、公の心こそ、いと、あはれなれ。

躬身 勅 詔

公の平生の仰に、大臣たるものは、その身の進退によりて、節操を、二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざる者多きぞ、口惜しきことのきはみなる。我こそ、躬を以つて、人臣の標準は示さめ」と、のたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げむことを、思ひ立ち給ひしかば、同僚の諸卿が、支へ止め參らせしをも、聽き入れ給はず、是非に」と、歎き請ひ給ひしかば、上には、忝くも、誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞き届けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し給ひけ

天恩 君恩 皇恩 歡 喜悅 雲の上 雲井

り。かくと承りて、公は、さしもに重き衾を押し退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ、家の子等を召し集へられ、今日こそは、病の輕きを覺えたれ。それ、杯まるれ」とて、酒を賜ひけり。人々、歡の色をなしたりけるが、さて、その翌日に、事、重らせ給ひぬるぞかひなき。今は、の際まで、夢幻の間にも、おほやけの事のみ、心に掛けさせ給ひ、なからむ後の事までも、人もて、雲の上にきこえ上げまるらせられたりと、いふ。

余は、本末の序もなく、思ひいづるまゝに、書きつづけぬあはれ、この文讀まむ人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、いや繼々に、かづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の

載
歲年

地下の靈を、百載の後にまで、慰めよや。(井上毅—梧陰存稿)

二一、籠居雜詠 (岩倉具視)

○
今はとは、おもひきれども、黒髪の、

○
亂れて筋も、わかれざりけり。

○
秋の夜の、今宵いかなる、今宵にて、

○
ひとり野寺の、月を見るらむ。

○
様々の、夢こそ見ゆれぬ、るまさへ、

人に變れる、わが身なるらむ。

二二、細川幽齋

上杉
景勝。
忠興
細川幽齋の
子。
奉行等
石田三成等。
内府
内大臣徳川家
康。

慶長五年の秋、奥の上杉、謀叛の聞ありて、徳川殿御發向の事あり。忠興、跡を慕ひて、馳せ下る。此の隙を窺ひて、大阪の奉行等、兵を起して、徳川殿を失ひ、參らせむと計る。内府に隨ひて、奥に下りし大名等が妻子、一々、召捕へて、質にせば、彼等、みな、御方に參らむとす。先、最初に、忠興が妻子を、城中に、迎へむとす。彼の妻は、女なれども、さる者の娘なり。又、日頃、我が夫の心の奥は知りぬ。使者、度々に及べども、更に、その催促に従はず。此より終り

自害
自殺
自盡
方人
味方

藤孝入道
忠興の父、幽
齋。

「さらば、さな云はせそ。人々の見こらしの爲、搦めとつて
參らせよ」とて、軍兵を差向く。忠興が妻、家人等に、防矢射さ
せ、みづから、十歳になる男子と、八歳になる女子とを刺し
殺し、家に火を懸けさせて、自害す。奉行等、案に相違し、なま
じひなる事を怠りだして、諸大名を、内府の方人になしお
ほせば、詮なしとて、これより後、人質とるべき沙汰に及ば
ず。此の上は、細川が城攻め落せ」とて、丹波、但馬の軍勢を差
向く。

然るべき兵をば、引き選つて、忠興具して、奥へ下れり。お
となしき者共は、兵、少し附けて、豊後へ下して、杵築の城を
守らせつ。丹後には、藤孝入道、年老いたると、幼き者共とば



かりにて、残り居り、はかばかしく、軍すべき者、多からず。さ
れども、入道、さるふる兵にて、少しも、騒ぐ氣色なく、宮津の
城を捨てて、田邊の城に
たてこもり、敵遅しと、待
細ち居たり。

川 抑、この入道と申すは、
幽弓矢、打物取つて、堪能な
齋るのみにあらず。さらぬ
小藝にだに、達せずとい
ふ事なく、天下に雙なき、

多才多能の人なりけり。中にも、敷島の道を、深く好みて、古

大内
内裡
禁裏
禁中

烏丸右大辨
光廣卿。

今和歌集の秘訣、ことごとく、此の人に傳れり。

されば、此の度、我が身、討死したらむ後、此の道、ながく、絶えなむ事を、悲み、城に籠れる始、相傳の書ども、取集めて、大内へ奉るとて、

古も、いまもかはらぬ、世のなかに、

こゝろの種を、のこす言の葉、

といふ、一首の歌を添へてぞ參らせける。

かくて、丹波、但馬の軍勢ども、雲霞の如く、おしよせ、十重、廿重に、取巻きて、火水になれと、攻めけれども、入道、ちつとも、ひるまず、防ぎ戦ふ。かくては、此の城、なかく、一時に、攻め落さるべうも見えず。烏丸右大辨、勅使として、大阪に行

勅詔
勅命
勅旨
綸命

朝家
公家
二位法印
藤孝入道。

易
容易
交易
三條西大納言
實條卿。

き向ひ、輝元・三成等に、勅詔を傳へらる。

「それ、和歌は、我が國の風として、天地開け始りしより、この方、百王の今に至るまで、其の道、長く、傳れり。然るに、今、古の事をも、歌の心をも、知れる人、忽に、失せなむ事、最、朝家の歎なり。いかにもして、彼の二位法印が、恙なからむやうを計るべし。」

と、宣べられたり。

輝元を初として、奉行等、謹みて、承り、急ぎ、早馬を立てて、寄手の軍をとどむ。元より、入道は、今を最期と、思ひきつて、戦ひし程に、寄手、容易く、引きて歸らむこと、叶ふべからず。此の由、また、都に聞えしかば、三條西大納言、綸命を含みて、

普天の下云々
詩經小雅に、
普天之下、莫
不王土、率土
之濱、莫匪
王臣。

丹後の國に下向ありて、速に、勅に應じ、その城を去るべし」とありければ、入道畏みて、普天の下、率土の濱、王土、王臣にあらずといふ事なしと承る。ましてや、此の微賤の身、かく、まのあたりに、籠渥のかたじけなきを蒙るをや。さりながら、入道、年若き時ならむには、弓矢取る身の習、天晴、死を、白刃の際に決して、深く、恩を、黄泉の下に感ずることもありなまし。今は、齡、既に、傾きぬ。たとへ、この戦に死することなからむにも、餘命、また、幾何ぞや。されば、惜しかるまじき身なる故に、私の名譽を貪りて、いかで、王命には、叛き參らすべき」と、答へ奉りて、やがて城を立つて、高野山にぞ赴きける。(新井白石—藩翰譜)

餘命
餘生
叛
貪(貪)
背

俳諧
俳句
發句
五七五

二三、女流の俳諧

徳川時代には、女流にして、俳諧をよくせし者、少からざりき。園女、すて女、千代女、智月、秋色、花讚など、皆、この時代の人なりき。

園女の句に、

忙しや、堇を摘めば、つくづくし、

春の野遊のさま、見るやうなり。

鼻紙の間、に、まぼむ、すみれかな。

摘みとりし、堇の花を、程經て、見出でて、萎れたるをも、捨てかぬる女心見えて、まほらし。

鼻紙
懷紙
疊紙

衣がへ、みづから織らぬ、罪深し。

母の恩の深きを思ふ心根の、殊勝なるを見るべし。

負うた子に髪なぶらるゝ、暑さ哉。

汗の流るゝ暑き日のさま、思ひやらるゝなり。

又、智月の句に、

鶯に、手もとやすめむ、流しもと。

やさしき娘心見えて、愛らしからずや。

朝顔の、咲くや親にも、叱られず。

今朝は、いくつ、咲き出でしなどと、早起するも花ゆるゑ、叱ら

れぬも花ゆるゑとなり。

すて女、

雪の朝、二の字二の字の、下駄の跡。

これは、六歳の時の句なりとぞ。

秋色の句に、

雉子の尾の、優しうさはる、董哉。

とは、雉子の姿の、優しく、美しき風情を、寫せるなるべし。

花讚、

かんざしよ、櫛よ、さて世は、暑いこと。

うるさきは、髪かざりなり。洗髪などにて涼まば、いかにとのこゝろなるべし。

子を寝せた、間をぬけ出でて、納涼哉。

母とならでは、え知らぬ涼しさなるべし。

なほ、千代女の句、三四を擧ぐれば、

あさがほに、釣瓶とられて、貰ひ水。

ほととぎす、ほととぎすとして、明けにけり。

うぐひすや、又言直し、言ひなほし。

ころびても、笑うてばかり、雛かな。

など、いづれも、めでたし。總じて、女は、物に感ずること深く、

且(旦)

且、こまかきところまでも、思ひやり届くゆるに、その詠みいでたる句も、亦、あはれ深し。(坪内雄藏)

談駢

二四、シカゴだより

九月廿四日、午後、兩人にて、シカゴ大學の參觀に赴き候

教授スモール氏、懇に、案内せられ、校長ハーバー氏にも面會仕り候。氏は、エール大學出身の學者にて、政治家としても、事務家としても、有名なる人の由、又、なかく、の交際家に御座候。この大學は、ロックフェラー氏一人の寄附なるよしに候へども、その宏大なる事は、我が帝國大學の數倍に候ふべし。男女混同の教育に候。

晚餐の後、フビアン氏の招待にて、劇場にゆき、非常に、愉快に感じ候。

廿五日、早朝より、ブルマンのスリーピングカー製造場に行き候。職工七千人、各、分業にて、働き居り候。ブルマン氏は、汽車の寢室を發明せし人にて、自己の地面内のみにて、

落膽
失望

萬の事を辨じ得る仕組となし、市と區別しありしが、近頃に至り、訴訟の結果、つひに、市に入る事となり、落膽して、死亡したる人に候。製造場の偉大なる、實に、驚歎のほか御座なく候。

廿六日は、早朝、ハチソン氏來訪せられ、氏の計畫になれる美術博物館へ案内せられ、序に、市立圖書館へも行き、十二時、歸寓いたし候。美術博物館の壯麗なる、見る物、皆、驚の種に候。一枚七萬圓ほどの値する額面を懸けたるにても、その一斑を窺ふに足るべしと、存じ候。圖書館は、市費にて維持し、證人だにあらば、何人にてても、無料にて、貸附いたすべきさだめに候。又、來客の隨意閱覽室は、頗、立派なるもの

高(密)
値
價

閱覽
觀覽

打算
計算

管見
淺見

差異
差別
相違

にて、夜間は、一卓ごとに、電氣燈の備あり。皆、無料にて、閱覽せられ候。役員等の丁寧親切なるも、感歎の外これなく候。人は、やゝもすれば、米國人が、實利の一方にのみ傾き、萬事金錢の上より打算するかの如く、申し候へども、其は、只、半面を知りて、他の半面を知らざる管見と、今更、思ひ當り候。今回の旅行にて、米國人の、平生の生活の風と、交際の時と、事務の時との氣風に、大なる差異あることを確め候。即、交際に於いては、隨分、金錢も費し、成るべく、親切に、盡力いたし候へども、事務に於いては、一步も假さず、一錢も損せざるやう、心懸け、正確に、勘定高く、なすやうに候。商業上の取引する時の米國人のみを見て、野卑なりとか、金勘定高

しとか申し候ふは、他の半面を知らざる爲と、存じ候。
當地にては、家賃、一個月、七八百圓より、千圓に及ぶもの、
珍しからず。この一事にても、いかに、その富裕なるかを、知
るに餘ある事と、存じ候。

昨廿七日は、早朝、シカゴ出發、ナイヤガラの瀑布、バッファロ
ーの博覽會を見物いたし候。節(鳩山春子)

二五、ナイヤガラ瀑布

ナイヤガラ瀑布は、世界中の、最大なる瀑布にして、雄偉
壯快、遙に、人の意表に出で、白虹・飛龍の比喻も、その眞景の
萬分一を、形容する事能はざるなり。故に、歐亞の文士・詩人、

意表
意外

疆界
境界

續々、杖を、こゝに曳けども、皆、筆を抛ち、稿を裂き、未嘗、人口
に膾炙すべき佳句・妙文を、寫し出したる者なしとぞ。

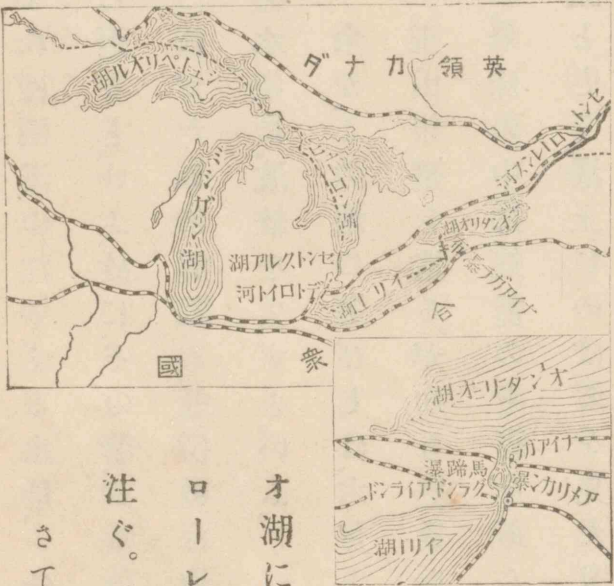
この瀑布は、合衆國と、北米英領との疆界の一分をなす、
五大湖中の四と、セントクレア湖との水の流れ來て、注
下するものにして、その五湖の面積を合計すれば、概算、八
萬五千九百六十方英里の廣さに達す。日本本島の面積よ
り小なること、纔に、一萬四千餘方英里なるのみ。そのシュー
ペリオル湖は、面積、二萬八千六百方英里にして、世界中、淡
水湖の、最大なるものなり。五十の河流、これにそゝぎ、位置
最、西にありて、瀑布を距ること、きはめて、遠し。次は、ミシガ
ン湖、無數の小河を容れ、面積、二萬千方英里、わが北海道よ

距
去

比較

り大なること、一千方英里なり。つぎは、ヒーロン湖、面積、一萬九千方英里、わが九州より大なること、三千方英里、湖中の島嶼、その數實に、三萬二千あり。次は、セントクレア湖なり。こは、上の三湖に比ぶれば、きはめて、小に、面積、纔に、三百六十方英里にすぎざれど、おもしろき島嶼おほく、名ある河川の、これに注ぐもの、數を知らず。この水、下りて、イリ湖となる。これを、第四湖となす。面積一萬二千方英里にして、わが四國より大なること、二千方英里なり。デトロイト河、これに注ぐ。この湖の東端、ナイヤガラ邑の近傍にいたりて、グランド、アイランドと稱ふる一島に遮られ、わかれて、兩派となる。瀑布に近づく前は、河幅せまく、地勢傾き

彎曲
屈曲
婉曲



て、流も急なるが、たちまち、地勢の、甚しき高低にあひて、直下するもの、これ、この瀑布なり。瀑布より下、十四英里にして、五大湖の一なるオンタリオ湖に入り、終に、出でて、セントローレンス河となり、大西洋に注ぐ。

さて、瀑布の、左にあるものは、彎曲して、その状、馬蹄に似たれば、馬蹄瀑の名あり。右にあるものは、アメリカン瀑といふ。蓋、その、合衆國の境内に、あ

るがためならむ。左瀑は幅、六百碼しにして、高さ、百五十呎、右瀑は幅、二百碼にして、高さ百六十四呎なり。數學家の言によれば、兩瀑の注下する水量、一分時間に、一億噸のおほきに至るといふ。故に、その響、萬雷の吼ゆるがごとく、大地も、これがために震動し、近傍數百歩の地にある家屋にては、盤水、常に、波紋を生ずといふ。

余が、この地に遊びしは、六月の下旬なり。氷柱の相集りて、玉山、銀臺を造るが如き、絶景を見る能はざりしかど、晝は、飛沫の中に、虹霓の七彩をあらはすを見、夜は、圓月の朦朧として、瀑上にのぼるを見たり。殊に、余が宿れる絶景館は、馬蹄瀑の近傍にして、兩瀑の全景を專にせり。一たび、樓

沫
池

疑是銀河落
九天

李白題廬山瀑布詩に、日照香爐生紫烟、遙看瀑布挂長川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天。

上の玻璃窓をひらけば、飛沫、忽衣を濡し、涼氣、膚を侵して、更に、時季の夏なるを覺えざるなり。さて、樓を下れば、兩岸絶景の地に、邑民、或は、飛橋を架し、或は、螺階を設けて、人々の眺望に備へたり。余も、また、この螺階を下りて、崖下に至り、仰ぎて、大瀑の注下するを見るに、足ふるひ、魂おどろきて、心に感ずるところあれども、口、これをいふこと能はず。到底、この瀑布の雄偉壯快は、余のごとき拙筆のよく、あるし得べきところにあらず。かの、漢土にて、詩仙といはるゝ李太白をして、この世に生れて、この瀑布をのぞましめば、「疑是銀河落九天」の句は、廬山に發せずして、必や、こゝに發せしならむ。(小幡篤次郎)

二六、今様三首(白石千別)

海底電信

浦島が子に、あらなくに、

波のそこにも、行きかよふ、

くすしき線の、音づれを、

ゐながら知る世と、なりにけり、

汽車

とどろきそむる、音につれ、

龍かも翔ると、見るばかり、

雲をおこして、磯ぎはを、

走るくるまぞ、めざましき、

訓盲院

警ひたる目の、あくまでも、

めぐみの杖を、つくづくと、

仰ぎても知れ、あきらけき、

御代のひかりに、隈はなし。

隈(隈)

二七、赤十字社

いにしへの戦争は、おほむね、敵を殺すを以つて、主要なる目的とゑたりしかど、近年に至りては、戦争の術、大に進歩して、ただ、敵に、戦ふべき力を失はしめむことを務め、捕

抗敵
敵對

救護
救恤

標章
徽章
標識

虜の如きも、既に、抗敵心なきものは、鄭重に、待遇して、妄りに、これを殺すがごときことなし。ことに、文明の諸國には、おのゝ、赤十字社と稱するものありて、互に、條約を結び、もし、同盟の二國、戰端を開く事ありとも、負傷兵、及び、病兵に對しては、彼我、ともに、これを救護すべき規定なり。されば、甲國の軍勢、乙國の病院を圍むことありとも、赤十字の標章あるを見る時は、決して、これを捕獲することを得ざるなり。

赤十字社は、今より、四十餘年前、クリム戦争とて、英露二國の間に、戰起りし時、英國の婦人ナイチンゲールが、奮ひて、戰地に赴き、負傷兵、または、病兵の看護に、従事したるに

濫觴
嚆矢
文久
孝明天皇の
時。

萌ししが、後、又、ソルフェリノの大戦に、塙佛伊、三國の兵數十萬、伊太利の原野にて、連日連夜、苦戦せし時、瑞西國のアンリー、ヂュナンといふ人、親しく、戰地に赴きて、負傷者等が困苦の慘狀を目撃し、直に、一書を著して、世人の注意を促したるより、有志の人々、瑞西國ゼネヴ、府に會し、此處に、一社を設けて、戰時に於ける、負傷者、病者の救護手段を議することとなれり。これ、實に、赤十字社の濫觴ともいふべきものにして、後、我が文久三年、終に、廣く、各國の同志者を招きて、ゼネヴ、條約を締結し、此の地に、萬國赤十字中央部を置きて、各國の諸社と、互に、連絡を通じ、其の基礎、ますます、鞏固となるに至れり。

認可
許可

我が邦にても、明治十年、西南の戦争に際し、負傷者病者を、救護する目的を以つて、博愛社を組織せしが、亂平ぎて後も、之を、永久常設の一社とし、平時、務めて、諸般の準備を整へ、事ある日、救護の事に従はむことを期したりき。然るに、明治十九年、我が政府、セネヴ、條約に加盟せしを以つて、此の社は、政府の認可を得、日本赤十字社と改名して、萬國赤十字中央部と、交通を開き、天皇、皇后兩陛下の御保護の下に、專、報國恤兵の事をつかさどり、旁、天災、地變の際に、傷病者の救護をつとむるに至れり。

日、清戦争に際して、この社が、一般に、軍人、軍屬の救護事業に、盡力せしことは、あまねく、人の知るところなり。特に、

待
遇

苦惱
苦痛
叩頭
頓首
稽首

清國は、いまだ、この條約同盟に、加らざるのみならず、清兵の、我が負傷兵を待つこと、殘忍酷虐、至らざる所なかりしに、我が赤十字社衛生部員は、彼の負傷者、及び、病者を遇すること、すこしも、我が病兵と異なることなく、貴重の軍糧と、藥物とを、あたへて、一時も、はやく、その苦惱を減せしめむことを務めたりき。されば、彼等は、みな、叩頭、感泣して、我が天皇、皇后兩陛下の、深き御仁惠を拜謝し、かつ、赤十字條約の貴きを感じたりとぞ。(國語漢文教程)

二八、　　メーリーライオン

北米、マッサチューセツト州の西部に、バクランドと呼べる一

伏屋
矮屋
陋屋
リンカーン
有名なる十六
代大統領。一
八六四年歿。

寒村落あり。今より百餘年前、この村に、エーロン、ライオン
といふ農夫、僅ばかりの田園を耕して、その妻と共に、七人
の子供を養育し、いぶせき伏屋に、細き烟を立てるたり。北
米合衆國が、ワシントン、リンカーンと共に、世界に誇れる、
教育家、メーリー、ライオン女史は、即、この無名の農夫の第
五女にて、千七百九十七年二月廿八日に生れき。

父は、信仰深く、心正しき者にて、朝は、まだ、明けはなれぬ
に、起きて、野に出で、夕は、暮れはつるまでいたづきて、困難
なる家計を支へつゝ、少しも、不平の色なく、一家、うちむつ
びて、楽しく、日を送りけるが、メーリーの、いまだ、幼かりし
程、父、いさゝか、心地そこなひたりとて、かりそめに、打臥し

悲歎
愁歎

しより、え、起きもあがらず、やがて、四十五歳を一期として、
歸らぬ旅に出で立ちぬれば、後に残されたる母子の悲歎
は、いふばかりなく、さらぬだに、乏しかりし生計は、一志ほ、
困難に陥りぬ。母は、七人の幼兒を引き受けながら、をゝし
くも、自、田園に出で行きて、かひがひしく働き、とかうして、
辛くも、一家をさゝへるたり。

再嫁
再醮

然るに、メーリー十三歳の時、母は、他に再嫁することと
なりしかば、其の後、メーリーは、かよわき一手に、家政を治
めて、よく、これを整へゐたるが、十八歳になりける時、その
兄、新に、妻を迎へければ、メーリーは、始めて、自由の身とな
れり。さて、メーリーは、生來、快活にして、情深く、また、甚、伶俐

伶俐
利口

首席
上席

始
初創

にて、村の小學校に在りし時も、常に、級中の首席を占め、學藝すぐれたりしかば、學校教師の職に就きぬ。これぞ、女史が、教育に、身を委ねたる始なりける。女史は、これによりて得たる報酬は、貯へおきて、聊も、無益の事に費さず、身装の如きも、極めて、質素にして、教授の餘暇には、ひたすら、己が學問を勵みけり。かくて、女史は、その貯へたる金をもて、アッシュフィールドなるサンダーソン中學に入りぬ。こゝにても、才學の譽高かりしが、程なく、學資盡きて、せむかたなければ、退校せむと志けるに、教員生徒、いづれも、これを惜まぬはなく、この事、いつしか、同校の評議員に聞えて、特に、月謝をゆるされしかば、女史は、多くもあらぬ所持品を賣りて、

聞
聽

學資に充て、辛くして、次の學期をも、終ふることを得たり。さて、教員の職に就かむとするに、此處かしこの村邑より、女史の名を聞きて、聘せむと請ふもの、いと、多かりしかば、これかれ、そのいらへに、困ずる程なりきとぞ。

二十四歳の時、更に、バイフィールドといふ地にある、ジョセフ、エマーソン氏の學校に入りぬ。エマーソン氏は、博學多能の聞高く、最、教授に巧にして、その夫人も、また、才藝優れたりければ、さながら、草木の、春雨に潤ひて、萌え出づらむやうに、女史の學業は、いよゝゝ進み、翌年、女史のもと、教を受けしサンダーソン中學に聘せられて、その助教となり、再、教育に従事する身となれり。その後、一・二の學校に轉ぜ

令譽
令聞

しが、至るところに、令譽を得て、或は、その功績をたゞへたる感謝狀を贈り、或は、特に、女史の爲に、美しき校舎を、新築したる地方もありき。かくて、五、六年がほどは、過ぎぬ。

女史は、今や、三十三歳に達しぬ。その頃、米國にては、女子の教育、いまだ、今日の如く、盛ならず。高等教育の門戸は、女子の爲には、堅く閉ぢられたりしかば、女史は、いかにもし、これを開かばやとて、或は、土地の有志家を訪ひ、或は、大學の校長、教會の牧師等を説きて、賛成を求むれども、大かた、冷淡に、聞き過ぐして、高等なる教育は、女子に用なき事なり」とさへいひて、これを退くる者ありき。されど、女史は、決して、失望せず。つひには、その目的の、成功する日あるべ

訪
問

ヒイッチコック

地質學者、一七九三年生、一八六四年歿す。

アーマスム
ホストン府の
附近。

きことを確信し、内に在りては、神に祈り、外に出でては、人に説き、はては、職を辭して、專、資金の募集に従事し、日夜、東西に奔走して、殆、寢食の暇だにあらざりき。

こゝに、アーマスム大學の教授に、博士ヒイッチコックといふ人あり。嘗、メーリー女史を教へし人なるが、女史の大なる計畫を聞きて、いたく、賛成し、これが爲に、一臂を添へられければ、この舉に資金を投ずる人、つぎ／＼、多くなりて、程なく、豫定の金額にも達しぬ。かくて、アーマスムの南なるサウスハドレーといふ、閑靜なる地を相して、直に、校舎の建築に著手せり。これぞ、有名なるマウントホリヨーク女學院にして、その礎石は、實に、千八百三十六年十月三日

親切
懇篤
慰勉

といふに、据ゑられたり。その後、學校はますます、盛大に赴き、基本金は、殆七萬弗に達し、女史の高風を慕ひて、來り學ぶ者、二千人の多きに及びき。
女史の、生徒に對する、極めて、親切にして、常に、温き情をもて、愛育しければ、皆、慈母の如くに慕ひ、また、知らず識らず、その徳に感化せらるゝに至れり。されば、その卒業生は、皆、高潔なる品性と、該博なる學識とを、具へざるはなく、教育に、傳道には、た、その他の事業に、貢獻したる者、少からず。殊に、北米合衆國の基礎たる、良妻賢母は、また、多く、この校より輩出せりとぞ。

千八百四十九年二月の下旬なりき。一女生の、病氣にて

金言
格言
名言

死にたるものありしに、女史は、生徒一同を集へて、死の畏るべからざることを説きて、己が義務を知らず、又、これを行はざるばかり、世に、畏るべきものはなし」と、いへりしが、この金言は、後に、女史の墓碑に彫られき。さて、この事ありて後、數日、女史は、病牀に就きしが、やう／＼、篤しくなりゆきて、三月五日、遂に、安らけき、永き眠に入りぬ。享年五十有二。生徒等は、さながら、慈母を失ひたらむ如く、悲歎に沈み、涙ながらに、その恩師を葬りぬ。

二九、道話一則

さる御町内に、婚禮振舞がござりました。お年寄をはじ

馳走
響應

揚
摘

壺
壺

め、町役家持の人々、一同に、座につきますると、さまさまの馳走がある。時に、かの年寄は、酒ときいては、笹の露にも、酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにして、ゐられると、亭主方が、氣の毒に思ひ、「お年寄様は、御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちと、お菓子なりとも、御取り下されい」と、南京の古染附の壺に、大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ、持つてくる。座中も、これは、よいお心付、ひらに、お菓子をめしあがられい」と、勧められて、年寄も、わらうはなし、ちからは、頂戴をいたしませう」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少し、きしむやうにおぼえたが、無理に、手をさし入れて、撮み出さうとするに、手首がつまつ

て、抜けませぬ。どうぞして、抜けるかと、色々に、こじまはして見ても、ひつばつて見ても、抜けず。まご／＼して居らると、側から、見つけて、どうぞなされましたか。「いや、手が、少し、つまりまして、思ふやうに、抜けませぬ」と、眞顔になつて、いはるゝ。それは、氣の毒。私が、壺を持つて居りませう。無理無體に、手をお引きなされ」と、一人が、むかうへ廻つて、壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は、手を前へ引く。互に、えいやと、引き合ふ有様。景清と、美保の谷が、鍛曳をするやうな」と、座中が、一同に、どつと、笑へど、年寄は、なかく、笑はず。泣顔になつて、どうも、痛んで、抜けませぬ」と、いふ。さあ、これから、大騒になり、醫者どのを呼んで來い。接骨では、ゆくまいか

醒覺

難澁 難儀 高金 高價

と酒宴の興も醒めはてました。
 時に五人組が一人進み出で、いづれもお騒ぎなされな。
 我ら承つたことがある。『むかし、司馬温公といふ人、幼き時
 大勢の小兒と共に、大なる壺のほとりに遊びましたが、一
 人の小兒、誤つて、かの壺の中へはまりました。大勢の子供
 は、これを見て、逃げ歸つたが、司馬温公一人は、歸らず、側な
 る、手ごろの石を取つて、かの壺へ、投げつけましたれば、壺
 は割れて、はまつた小兒は、不思議に、命を助りました』と、あ
 る人の話ぢや。今、お年寄の御難澁は、この話に、よう、似てあ
 る。いざや、我らが、司馬温公となつて、たとへば、その古染附
 の壺が、失禮ながら、何程高金の品でも、お年寄の腕には、換

攪擷

片意地 頑固 偏屈

へられぬ」と、あかつべらしく、烟管を提げ、むかうへまはれ
 ば、年寄は、氣の毒さうに、壺を被つた手を、突き出すと、只、一
 打に、打ち碎いた。何がさて、座中は、金米糖が散らかつて、雪
 を降らしたやうになると、やれ、お年寄は、お助りなされた
 か」と、其の手を見れば、抜けぬこそ道理。金米糖を、一杯、つか
 んでゐられたと、申すことぢや。
 なんと、をかしい話ではござりませぬか。攪んだものを、
 放しさへすれば、自由自在に、手は抜けたものを、一度、つか
 んだら、首がちぎれても、離すまいと、片意地な生れつき。そ
 れで、自由自在の大安樂が、出来ぬのぢや。かく申せば、錢金
 の事のやうなれど、つかむものは、こればかりではない。器

量のよいのをつかみ賢いをつかみ、負惜みをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで、離すまいと、かつぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、愼も出來ず、せん方なさに、癢氣抑へたり、顔をかめたり、酒飲んで紛したり、さりとは、氣の毒なものでござります。

(柴田鳩翁—鳩翁道話)

再訂高等女子讀本卷六終

明治三十九年十一月十九日訂正二十七版印刷
 明治四十年十一月二十日訂正二十七版印刷
 明治四十一年十一月二十日訂正二十七版印刷
 明治四十二年一月二十日再訂再版印刷
 明治四十二年一月二十日再訂再版印刷

再訂高等女子讀本

全十册 定價 各金貳拾四錢



校訂者 佐藤 球

編纂者 明治書院編輯部

發行者 三樹 一平

印刷者 綾部 喜久二

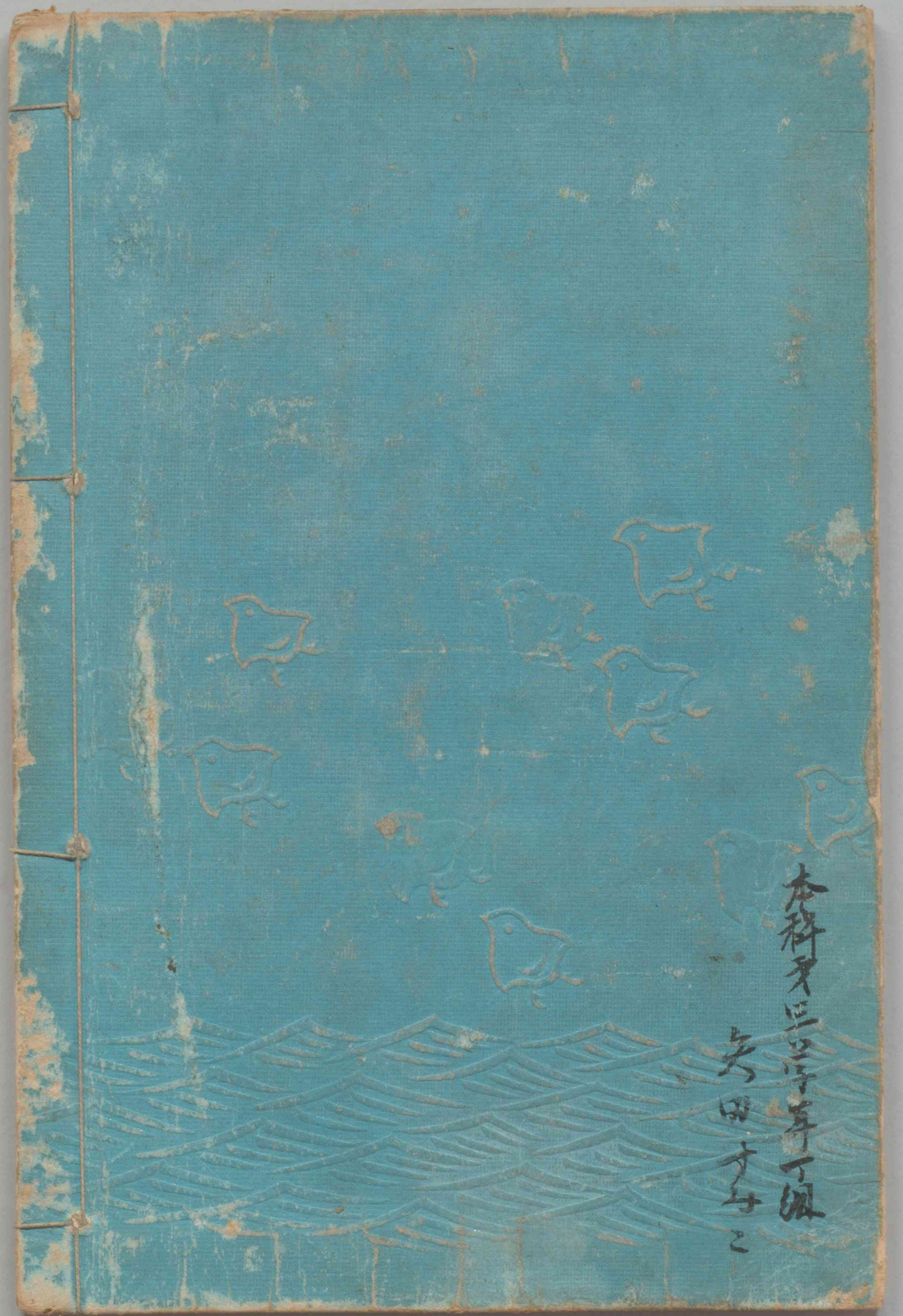
東京市神田區錦町一丁目十番地
 東京市神田區雉子町三十四番地

發行所

明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

振替貯金口座四九九壹番
 國電話本局二四三八番



本科学三学年丁組
矢田才也